

変化と進化 Change and Evolution



総務理事 辻 ゆかり

電子情報通信学会の創立 100 周年にあたる記念すべき年に総務理事という大役を仰せつかり、この 1 年は、通常の総務理事業務（結構な仕事量です！）に加え、100 周年記念行事の準備（決めること & やることが一杯！）を進めつつ、ずっと「本会のあるべき姿とは何か?!（世の中は変わったけど学会は?）」を考え続けてまいりました。

本会は 1917 年に「電信電話学会」として産声を上げました。本会創立時の利根川会長の就任演説が会誌 5 月号に掲載されておりましたので、読まれた方も多いのではないかと思いますが、利根川会長は「研究を怠ると、必ず世間の進歩に遅れる。特に、我々の専門分野においては、その感が強い。研究は必ず学理的及び実行的の両方面から行わなければならない。」と述べられています。とても 100 年前の御発言とは思えぬような、現在にもそのまま通用する内容です。本会名称は、その後、1937 年（創立 20 周年）には「電気通信学会」、1967 年（創立 50 周年）には「電子通信学会」、1987 年（創立 70 周年）には現在の「電子情報通信学会」に改められました。

それから 30 年、学会名称は変わっておりませんが、ICT 技術は著しい発達を遂げ、通信分野を取り巻く状況は大きく変わりました。長らく続いた電話時代と初期のデータ通信時代には、“つながる”こと自体に大きな価値があり、帯域を太くし、処理性能を上げるなど、通信そのものの性能向上こそが最重要課題でした。その後、インターネットやモバイル通信が世の中に浸透し、“いつでもどこでもつながる”ことが当たり前になってきたことは、皆さん、日々の生活の中で実感されているところかと思えます。また、近年の深層学習の登場は、大量データから新たな価値を創出するデータオリエントドな世界を加速しています。このような状況下において、ICT 技術を様々な分野に活用しつつ、あらゆるシーンで発生する大量データから新たな価値を創出するためのエコシステムをどう構築するかが、大きな課題となっています。

ここで、学会の置かれた状況を振り返ってみますと、従来、ひたすら性能向上に注力していた時代には、同じ分野を専門にしている者同士が、研究領域ど真ん中の研究テーマについて切磋琢磨する場として、学会が存在してきました。しかしながら、つながる先にある、新たな価値創出を目指すようになった今、それだけでよいのでしょうか。私は、これまでの研究生活において、異業種や異文化の方々とは数多くの共同検討をしてまいりました。いずれの場面においても、各業界では当たり前の専門用語だったり、共通認識となっている文化背景だったり、初めのうちは正直よく分からず、「この人たちは一体何を言っているのだろう」と戸惑うばかりでした。ところが、侃々諤々の議論を続けるうちに、お互いの言葉を理解し、アイデアに触発され、結果として面白い成果につながるものが多々ありました。本会に求められているのは、このような他分野の方々を抱える課題や夢と、本会が有する技術とのマッチングや、セレンディピティの着想を可能とする環境提供なのではないかと考えています。他分野の方々とは新たな価値を生み出すワクワク感を共有し、学際領域の研究を活性化することができれば、本会は様々な分野を結び付ける触媒としての新たな役割を担えるのではないのでしょうか。100 年前に利根川会長が言われた研究スタンスを進化させ、「専門性を高めること」と「周辺研究でのセレンディピティ」の両輪を促進していけるよう、あと 1 年、学会役員の一員として取り組んでいきたいと思えます。